

要 旨

本稿では、日本の上場企業の個別企業データを用いて、1990年代不況下における設備投資の低迷と銀行貸出との関係を実証分析した。これまでの先行研究では、設備投資関数の単一方程式を計測し、アド・ホックに説明変数として加えられた銀行のバランス・シートの健全性指標などの係数を検討することで、貸し渋りによる設備投資への影響などが議論されてきたが、本来であれば、銀行貸出の意思決定プロセスを含めて検討する必要がある。そこで、本稿では、貸出供給関数と設備投資関数の連立方程式を用い、これらを同時に計測することで、貸し手の貸出行動の変化と、その設備投資への影響を同時に検証した。得られた結果は以下のとおりである。

1992 - 2002年度を通してみると、銀行貸出は借り手の資金需要を十分に反映しており、設備投資の低迷の主たる要因は設備投資需要の減少である可能性が高い。しかし、1997 - 1999年度に限ってみると、借り手の資金需要が十分に満たされるような銀行貸出が供給されなかった可能性が高い。銀行のバランス・シートの健全性が貸出行動を制約しており、キャピタル・クランチの側面も指摘できる。こうした状況下において、設備投資は銀行貸出の収縮の影響を受けた可能性が高い。

1997 - 1999年度に銀行貸出が借り手の資金需要を十分に満たさない状況は非製造業で顕著に表れ、それに伴い設備投資が内部資金の制約を強く受けたものと推察される。また、情報の非対称性の問題がより深刻であると考えられる規模の比較的小さい企業や、返済能力に対する不安が比較的大きい収益性の低い企業を中心に、銀行貸出が十分に供給されなかった可能性がある。

Keywords : 設備投資関数, 貸出供給関数, 貸し渋り, キャピタル・クランチ, 情報の非対称性

JEL classification : D92, G32